

No.32 October 2001

特集 In Different Voices

Womanist



フェミニズム・宗教・平和の会

もくじ

In Different Voices

「拝啓 小泉総理大臣殿」…………… 児玉佳與子 1

扶桑社版『新しい歴史教科書』の与謝野晶子論に触れて…………… 齊藤 元子 5

恐怖の地への旅…………… 横山 杉子 6

Oさんへ…………… 申 英子 10

タイの女性について私の思うこと…………… 勝又 美保 17

新しい生活の状況…………… 江口みりあむ 20

アーミッシュの生活から考えたこと…………… 野本千津子 21

女と国家——観念による呪縛

B 三つ巴の性(一)…………… 河野 信子 23

わたしと仕事

男と女が「混ざっている」のが共同参画か

——男のことも考えてあげよう、でいいの？…………… 下村美恵子 25

有職女性と専業主婦との対立を超えて…………… 金子 珠里 29

仕事…………… 糸川 優 31

近況報告…………… 樫村 愛子 32

「もてない女」は如何にキリスト者であり続けたか(三)——仕事篇——…………… 金子(真鍋) 祐子 33

例会報告…………… 千葉 悦子 37

編集後記…………… 小松加代子・山下暁子・奥田暁子 40

「拝啓 小泉総理大臣殿」

児玉佳與子

以下は平成十三年八月六日から七日にかけて、私が思いきって総理に出した手紙と、一日遅れで出したビデオ(共に速達)に添えて出した手紙のコピーである。誰にも相談する暇なく、八月十五日が迫るのに焦って郵送し、後から二、三の方にご意見を仰ぐためコピーをとつてあつた。そこへ小松さんから原稿依頼の手紙が来たので、九月五日から十二日まで、「女性と仕事研究所」が主催した第十一回女性と仕事アクションツアー「欧州の企業と女性労働視察の旅」に参加して、ミュンヘン、オーストリア、ブダペストへの旅に出る直前ではあつたが、テーマ二の中で書かせていただく旨お伝えして出発した。アメリカでの大惨事が起こったとき既に機上の人だったので幸い無事帰国できたが九月二三日に京都国際会館で催される世界女性文化会議・二〇〇一でのワークショップで私が大原女の衣装を着て日英両語で話すことになっている研究発表(類似的講演は今年三月七日にピッツバーグの日米協会でもしてきた)の要旨が「手書きだったので印刷には間に合わない、Eメールでなら可能性はある」というファックスが主催者の富士谷あつ子氏から入っていた

のに対応したり、薬が足りなくなつたという東京の姉に至急漢方薬を送つたりしているうちに期日に遅れて、申し訳なく思っている。

近況報告をかねた言い訳になつた上に、これからテーマ二について書かせていただこうという図々しさでもつと申し訳ないが、此の度は頁数の制限もないので次にいよいよ本文を書かせていただくことにする。

「拝啓 小泉総理大臣殿 突然お手紙を差し上げるご無礼をお許しくださいませ。私は天理大学で女性論を講じる一介の非常勤講師でございます。一九九五年、北京での国連第四回世界女性会議のNGOワークショップに女性と仕事研究所主催のツアーに参加して出席しました。その折一週間の日程の中に上海を訪問し、グループの中の中国女性のご主人が、自宅で中国語で放映されていた「回首抗戦」という番組をビデオにとつてくださったものを、手渡して下さいました。私どもはそれを持ち帰り、私は大学に中国語学科があつて、中国人の先生が日本語もよくお出来になつたので、研究室で一緒に見ていただいて、一部翻訳していただきました。そして驚きました。抗日戦を回顧するそのビデオの中には、日本軍から受けたひどい行為と損害が、中国全土にわたつて(台湾も含めて)これでもか、これで

もかと数字をあげ、目撃者または被害者が頬や胸の銃剣のあとを見せつつ、中国語の字幕を添えて、ビデオリアル化して放映してありました。

三光作戦（焼き尽くし、殺し尽くし、奪いつくせ）百人斬り（そう威張っている日本兵の写真入り）、南京虐殺（数万〜三十万人ともいわれている）、七三一部隊のひどい生体実験（生証人談）等々数えあげればきりがありません。その史実の検証は難しいのでさておき、私がここで問題にしたいのは中国人と、そのとき中国を訪問していた全世界の人々で、中国語が理解できる人々、画面と数字からその内容を想像できる人々が、日本軍の犯した残虐な行為について、これだけ知っているのに、当の日本人が余りにも知らない、あるいは知っていてもこれだけ視覚化し、数字化してリアルに感知してはいないということです。相手の立場に立つて感知したり考えたりはしていないということです。

その余りにも深刻なパーセプションギャップを少しでも埋めるお手伝いをするために、私はそのビデオのコピーを作ってお贈りしたいと思います。私はこのビデオを、首相が、靖国神社参拝の決断をなさる前に、ご覧になれますように切に祈っております。そしてこのような迷惑な侵略行為・残虐行為を命令した——少なくとも止めなかった——A級戦犯が合

祀されている靖国神社を八月十五日に首相として公式参拝なさることを思い留まつて下さいますことを切に祈っております。個人参拝なら、それは個人の信仰上の自由ですから仕方がございません。公式参拝に反対している人で個人参拝なら結構という人を何人か知っております。それもできるなら八月十五日という、隣国人たちにとっては全く違った意味を持った、刺激的な日を避けていただければと願うのです。今ここで隣人たちの感情を大切にせず、世界の孤児化していくことは、日本にとり長い目で見て大損害だと思っております。

さらに踏込んで、首相とタウンミーティング的に対話することを許されずならば、「死ねば皆仏さんになるのだから今日の平和と繁栄の基礎となり犠牲になって死なれた方々に平和を祈って参拝するには当然」というお考えには二重の意味で賛成しかねます。どんなに悪いことをした人、結果として残虐行為をゆるした人でも死ねば参拝の対象になる、というのでは、善悪の基準、モラルの基準が壊れてしまうのではないでしょうか。少なくともそう考える外国人、外国の宗教は沢山あるのではないでしようか。

また、あの戦争で亡くなった方々は、あの戦争とそれをゆるした人々の犠牲になったのであって、平

和と繁栄はそのあとに生きた人々の汗と努力、それらの無念にもなくなつた方々の分まで生きなければと決意し、二度とあんな戦争は起こすまいと決意し頑張つた人々によつて築かれたのではないでしょうか。

ご多忙な首相のお時間をこれ以上いただくことは致しませぬ。私的な都合により、これ以上早くこの手紙とビデオをお送りすることが出来ませんでしたことを深くお詫びしつつ、祈りをもつてペンを置かせていただきます。

猛暑の折から、くれぐれもお体ご自愛の上、よりよい日本と世界のために、より一層のお働きをして下さいませよう祈りあげます。

敬具

平成十三年八月六日

児玉佳與子

小泉純一郎首相殿

P. S. ビデオのコピーは手間取りますので(朝十時に店が開くので今出掛けますが)一刻も早くこの手紙の趣旨だけでもお伝えするため、ただいま近くの郵便局へ行き、首相官邸のアドレスを聞き、速達で投函させていただきます。それにそのようなビデオが一冊、後便で届くという予告をさせていただきます。怪しむことなく開封していただけると存じます。実はこのビデオの部分的日本語訳が昨夜どうし

てもみつからず、まずはこのままでお送りさせていただきますこと、残念ではございますがご了承くださいませ。」

この手紙は返されてこなかったもので、あるいは首相のお目にとまったかも知れない。ところがである。ビデオの方は結局、開けずに送り返されてきたのである。「せっかくですがお受けできませんので返送させていただきます。何卒ご了承ください。」と印刷した紙片をはられ、小泉という赤い判を押されて。

そのビデオに私が貼つた解説には、最初に出てくる中国の国家副主席の談話の要旨(まだ目撃者、被害者が生存中に二度とこういうことが起こらないようにこれを編集した)を書いておいたのだが。また次のような手紙を小さくたたんで入れておいたのだが。

「本日午前中にとり急ぎお手紙だけ速達でお出しした者でございます。ビデオのコピーを作ってもらいましたら全部で三時間半あり、後半は一九四五年の勝利以後の祭典・歌唱が多く、今回の目的のためには第一巻(二時間)の日本軍の暴行目撃記だけで充分と判断致しました。字幕に出てくる文字から推察できることは僅かで、私が天理大学の中国語の先生と一緒にビデオを見ておりました際、時々説明し

てくださったところによると身の毛のよだつような惨状が多く、中国語（や韓国語）を聞いて理解できないのは私どもの大きな欠陥だと思いました。過去の出来事をヴィジュアル化する上で不自然な点は感じましたが大切なことは語られている中味であり、それらを見、聞きした中国人がいかに多かつたであろうかと思えますと、あの戦争に関する日本人とのパーセプションギャップの深淵さを思います。その時の事情と理由はいかにもあれ、外国人が自分の国の中にドカドカ入ってきてこういうことをされた身になり、一旦は相手の立場に立つて物事を考えてみることを大切さを思います。もちろん、こちらの立場、考え方をしつかりせつめいし、どこまで歩みより、折り合いをつけることができるかを探ることが大切なことは申すまでもございません。Give-and-take, compromise ということは共存共栄の民主主義の大切な手法だと存じます。どうぞ「決断の人」が「頑固な人」にならないようお願い致します。

他方（公式参拝を）「やめなさい」という言い方は内政干渉のように聞こえますが、中国の広汎な民衆の感情をよく知っている人が、「やめないと本当に大変なことになりますよ」という趣旨を伝えようとして、言葉の微妙な操り方に窮していった言葉のようにも受け取れます。

超御多忙な首相をつかまえて、これ以上の「釈迦に説法」は避けませんが、どうぞ私の善意をお汲み取りくださいまして、善処してくださいませよう、お願い致します。八月七日 児玉佳與子」

かなりの枚数になったので、今回はこれでやめるべきかも知れない。皆様の忌憚なきご意見を伺いたい。

歴史教科書問題に関しては今回の旅行にも資料を持っていたが読みきれなかった。とりあえず小森陽一・坂本義和・安丸良夫編『歴史教科書 何が問題か 徹底検証 Q & A』（岩波書店、二〇〇一）はいろいろな点を気付かせられ、考えさせられて、お薦めである。扶桑社の教科書も買ったので、これから逐一読み比べて勉強し続けたいと思っている。韓国語や中国語ができれば、あちらの教科書や博物館でどのようなことが教えられているのか知ってギャップを埋めるお手伝いがしたいが、それができないのが大変残念である。

扶桑社版『新しい歴史教科書』の 与謝野晶子論に触れて

齋藤 元子

七月十日朝日新聞朝刊掲載のコラム「晶子はただ子
だくさんの母か」を読み、扶桑社版『新しい歴史教科
書』の与謝野晶子に関する記述に向けた批判に、全く
同感の思いを抱いた。

扶桑社版『新しい歴史教科書』は、日露戦争の反戦
歌として広く知られている晶子の「君死にたまふこと
なかれ……」について、「晶子は戦争そのものに反対
したというよりも、弟が製菓業をいとなむ実家の跡取
りであることから、その身を案じていたのだった。晶
子は家の存続を心に留めていた女性であった」と解説
している。これに対して、コラムの筆者である早野透
氏は「世上、反戦歌と受け取られているけれどそうじや
ない、実家のことを心配しただけなんだとでも言いた
いのか。」と強い口調で批判している。

私は扶桑社版『新しい歴史教科書』を手にとってい
なかつたので、このコラムを読むまで、晶子について
の記述内容は知らなかつたのであるが、韓国、中国か
らの修正要求に対する一連の対応から推測して、この
教科書の執筆者は、女性、障害者、外国人といった社

会的マイノリティの痛みや苦しみに対しても無理解な
人たちに違いない、という印象を強くしていた。

そのような折に、新聞で目にしたコラムのタイトル
に引き込まれて、読み進むうちに、まさに「予感の中！」
の確信を得た。扶桑社版『新しい歴史教科書』の執筆
者の一人が「自虐史観ではなく、自国の歴史に誇りを
もてるような記述をめざした。」という主旨のコメン
トをしていたのを、記憶している。国民の半分を占め
るのは女性である。その国民を自ら貶めることは、何
の問題もないというであろうのか。それとも、女性は
自国の歴史とは無関係であるとも言いたいのか。

私はここ数カ月間、研究として、明治期に来日した
アメリカ人女性宣教師による日本での邦文出版活動に
ついて調査し、一プロテスタント教派の女性宣教師が、
日本人女性に向けて発行していた『常磐』という雑誌
を発見した。当時の日本で出版されていた婦人向け雑
誌のほとんどが、良妻賢母の育成を目的としていた中
にあつて、この『常磐』はキリスト教信仰に基づく、
合理的なライフスタイルの提示をめざしたユニークな
雑誌であつた。『常磐』は、婦人雑誌ジャーナリズム
の研究において、これまでほとんど触れられていない
が、後に羽仁もと子により創刊され、今日まで続く『婦
人之友』にも、影響を与えた可能性が認められ、婦人
雑誌史上、もつと高い評価が与えられてもよい雑誌で

はないかという印象を得ている。

だが、日露戦争期に発行された『常磐』を見ると、戦争肯定の論調は否めない。日露戦争に対する『常磐』の姿勢は、以下のように要約できる。南北戦争の際、アメリカの女性は、銃後の守として、家庭を保護したばかりではなく、傷病兵を慰問したり、戦場に送る救援物資の調達資金を得るためにフェアを催したりするなど、奉仕活動も行っていた。この奉仕は、アメリカの女性たちが組織的な社会活動を展開して行くためのよい経験の場となり、後に海外伝道運動や禁酒運動が女性の手によってなされ得る下地が形成された。よって、日本の女性も、この日露戦争を機会として、奉仕活動を積極的に行うようになることを期待している、といったものである。そして、東郷平八郎の写真画を入れる額面の作り方を教授し、室内の飾りにすること奨励している。

私は『常磐』の日露戦争関連記事を読みながら、晶子の「君死にたまふことなかれ……」に共鳴するような記述に出会えるのではないかと、かすかな期待を抱いていた。だが、残念にもそのような出会いはなかった。当時の日本のキリスト教界は、女性宣教師に限らず、一部の反戦論者を除いて、戦争には肯定的であった。戦争を正義とみなす社会気運の中、晶子が反戦の思いを高らかに歌い上げたことは、長く語り継がれる

べきものである。

早野氏は「中韓両国との間の騒ぎにはならないけれど、日本国民としてちと変だなと思うところはまだまだある。」として、晶子の箇所をあげているのだが、その「変だ」と思う気持ちをやり過ぎずに、報道したジャーナリストとしての姿勢に敬意を表したい。そして、早野氏の指摘に触発され、晶子の反戦の思いを跡継ぎの心配といったものにすり替えた扶桑社版『新しい歴史教科書』に対して、多くの女性が抗議の声を挙げることを希望している。

恐怖の地への旅

横山 杉子

先日電話があつて、何か書くように言われました。最近来日した米国のフェミニスト神学者フィリス・トリブルの講演会のことなどどうかと言うのです。それにヒントを得て、思いつくままに、このごろ感じたことと絡ませて書いてみることにしました。

この六月、「帰ってきたミリアム」という題でトリ

ブル氏の講演会があるというので友人と聴きに行きました。聖書の伝統的な読み方ではモーセの蔭に隠されて軽視されてきたミリアムの姿を掘り起こす物語分析の作業過程は見事でした。聖書のなかにほぞんされているミリアムに関する断片を拾い上げ、フェミニズムの視点でそれらをつむぎ合わせることによって、これまでの男性支配的、男性中心的視点による人物像とは異なった、多彩な役割を担ったミリアム像（仲介者、音楽家、モデル：預言者、詩人、祭司：救出者、ダンサー、弟子）が出現するのです。

会場は満席であり、講演の後も途切れることなく質問や発言が続きました。「最も栄光に満ちた神、主に向かつて歌え。父権制とその騎手たちを神は海に投げ込まれた」という勇ましい替え歌は満場の喝采と笑いを浴びました。楽しい夏の夜のひと時でした。

しかし、わたしは彼女のもう一冊の本「旧約聖書の悲しみの女たち」（日本基督教団出版局、一九九四）に心を奪われるのです。英語のタイトルは「Texts of Terror」、直訳すれば「恐怖のテキスト」で、まさに恐ろしい物語の本です。この本を私は教会の読書会で読みました。

この本は聖書のなかにある、女性が父権制の犠牲になる四つの物語を語っています。すなわち、奴隷として酷使され、辱められ、拒絶されたハガル、強姦され、

捨てられた王女タマル、側女でレイプされ、殺され、切り刻まれた名前のない女、そして処女のまま殺害され、献納されたエフタの娘です。トリブルは方法論としては修辞学分析を用い、家父長制イデオロギーで汚染された聖書の記事の中から丹念に、注意深くそれぞれの女たちに関する断片をひろいあげます。そしてそれらをフェミニズムの視点から再構築するのです。これらの物語は先に述べたミリアムの物語とは異なり、その結末は痛みと悲しみをもたらすものです。

この本の第一章は創世記にあるハガルの物語です（二六章と二二章に同じような主題の物語があります）。その一部を取り出してみます。アブラム（のちにアブラハムと呼ばれる）の妻サライ（のちにサラ）は自分に子が生まれないので、彼女の仕え女、エジプト人ハガルの夫に差し出し、ハガルは子をはらみます。自分が子を宿したのを知って、ハガルは新しい視点を体験します。「彼女の主人はその目の中で取るに足りないものであった（彼女は女主人を見下げるようになった）。（創世記16:4）のです。ハガルをアブラムに妻として与えることによってサライは自らが高められることを望みました。

しかし、結果的にはサライは召使のハガルの地位を彼女自身の地位へと引き上げるようになります。それによってサライ自身はハガルの目のなかで低められる

ことになるのです。従来の解釈ではこのハガルの態度は「女主人を見下げる」という否定的な意味に解釈されていましたが、トリブルは、「この予期せぬ事態は二人の女性の間に相互性と平等の機会を与えた」(p.35)と見ます。しかし、サライは相変わらず古い秩序、家父長制の中にとらわれ、このようなことになったのはアブラムの責任だと非難して、ヤハウエに裁きを訴えます。これに対し、アブラムは消極的な態度をとり、サライに言います。「あなたの仕え女はあなたの手のうちであり、あなたの目によいように彼女を取り扱いなさい」(16:6)。

サライがハガルを苦しめたので、ハガルは荒野に逃げます。「ハガルは苦難の僕になり、パロのもとでのイスラエルの窮状の先駆者となった」(p.37)のです。彼女を束縛と抑圧から救い出してくれる神はありませんでした。また、彼女も神に助けを求め願うことをせず、独りで自らの生き方を決め、荒野への脱出を遂行します。荒野の泉のほとりでヤハウエの使いはハガルを見出します。

驚くべきことに、エジプトの仕え女ハガルは「聖書の中でそのような神の使いが訪れる最初の人である」(p.39)のです。神の使いは「ハガル、サライの仕え女よ」(16:8)と呼びかけます。神の使いはアブラムとサライが使うことのなかった彼女の名前を呼んだの

です。しかし、主の使いの命令は「あなたの女主人に帰りなさい。そして彼女の手のもとで難儀を苦しみなさい」(16:9)でありました。神の使いの言葉の中でもハガルの地位はサライの仕え女でしかありませんでした。ここでは神は虐げられた者の側には立たず、抑圧者と見解を同じくしているとトリブルは主張します。

天の使いから子供の誕生の告知を受けて、ハガルは「自分に語りかけられたヤハウエの名前を呼び、『あなたは見られる神です』」(16:13)と言います。すなわち彼女は「新しい視野で神を見る。ハガルは神学者である」(p.46)のです。さらにトリブルはこのハガルの命名の行為は「見給う神と見られた神として神と人間の出会いを結びつける」(p.46)と述べています。

しかし、この物語はイシマエルの誕生とアブラハムの父性を強調することで終わります。二一章にあるもうひとつの物語でも神はサラの側に立っています。サラは自分に息子イサクが与えられると、イサクの相続がハガルの息子イシマエルによって危うくされることを恐れ、「この奴隷女とその息子を追い出してください」(21:10)とアブラハムに命じます。神の語った言葉に従ってアブラハムはハガルとその息子を荒野に追放します。「はじめから神がサラを支援されるので、ハガルは無力である。その地位に止められて、この奴

隷女は搾取、乱用、そして排除される罪のない犠牲者である。」(p.68)「このエジプト人の奴隷女は、神によって打たれ、砕かれ、そしてイスラエルのために傷つけられた。彼女の上には、彼らを全きものにするためのこらしめがおかれた。」(p.69)そして、次の言葉で彼女の物語を締めくくります。「サラとアブラハムの子孫であるわれわれはすべて、ハガルの物語の恐怖に対して答えなければならぬ。彼女が差し出している神学的な挑戦を否定することは、信仰を偽ることである」(ibid.)。

彼女は「聖書を解釈するのに聖書を用い」(p.22)ます。この本で彼女の拠って立つところは「第二イザヤの苦難の僕のうた、福音書の受難物語、パウロの書簡の中の聖餐に関する箇所」(p.22)です。ここでは「女たちが苦難の僕であり、キリスト像である」(p.22)のです。この本で語られている四人の女性たちの苦しみは十字架の苦しみと等しいものであり、しかも幸せな結末をもたらさないと結論付けます。「復活の中にこれらの物語の贖いを求めることは、正道を踏み外している。」(p.21)とトリプルは言います。しかし、その恐ろしい物語を語り、聞くことは「悔い改めを呼び起こすであろう」、そして「悲しい物語は新しい始まりを生み出すことになるであろう」(p.22)と続けます。

トリプルのこの真摯な姿勢は私の胸を打ちます。これら抑圧された女たちの苦難と犠牲をすぐに、すべては神の意志であるという結末に持つていくような解釈の陥穽にはまることなく、敢然とこれをはね除け、権力を持つ者の側に立つ神が抑圧的な神であることを明言しています。男性中心主義的な聖書のテキストは神の啓示を指し示してはいないということです。このような批判的な聖書の読み方に私は深い共感をおぼえます。

私の通っている教会ではこの何年か八月の第一主日の席上献金は従軍慰安婦の国家補償を求める運動のために捧げられます。今年の夏、「新しい歴史教科書をつくる会」の教科書採択の動きを契機にその内容が再び話題になりました。「つくる会」はこれまでの社会科教科書の中にある視点を「自虐的史観」と決め付け、もつと日本人としての誇りを持つような歴史教育をすべきだと主張しています。そのためには従軍慰安婦などは教科書から削除するべきだと。現に私も教科書が市の図書館に展示されたとき、確かめてきましたが、従軍慰安婦に関する記述はみあたりませんでした。彼らによれば、従軍慰安婦のことを語るのは「トイレのことを書くのと同じだ」そうです。

この恐ろしい言葉を聞いて、私は思いました。似ている、似ている、どこかで聞いた話と。そうです、「悲

しみの女たち」の中の、この本の中で最も恐ろしい第三番目の物語……名も無い一人の女に対する裏切り、強姦、拷問、殺人、そしてばらばらに切断するというはなしです。トリブルは、「それはわれわれが忘れてしまいたいのだが、語らなければならないと命令されているものである。それは男の力、残忍性、勝ち誇りの恐ろしさについて、女性の無力さ、虐待、そして完敗について描写している。この物語を聞くことは、残酷な恐怖の世界に住むことであり、それはわれわれが向こう側を素通りすることをゆるさないのである」(p.118)と述べています。

ここでトリブルの取り組みが言わんとしていることは、権力・差別によつてこれまで無視されたり隠蔽されてきた、あるいは沈黙が守られてきた、語るだに恐ろしい過去を忘却のかなかたへ葬り去つてはいけないうことなのです。それは掘り起こされ、語られなければならないのです。そして、そうすることを、抑圧された者の解放をはるか望み見る彼女の信仰が命じるのです。彼女の語る物語は、読者をも辛い孤独な旅へと出立するようにと促します。一人の日本人であり、信仰を持つ者として、私も、自分自身も傷つくことを覚悟して、過去の日本が歩んできた道を恐怖の物語の地へと出かけなければなりません。この旅は、二度とこの恐怖が繰り返されないために、そして癒しが与えられ

るために必要なプロセスなのです。アジアの国々の人々に対して私(たち)もまたアブラハムとサラの末裔なのですから。

〇さんへ

申 英子

昨年につづいて猛暑の中いかがお過ごしでしょうか。

大阪の暑さは仕方がないとして、東京方面のこの厳しい暑さは不気味ですね。地球温暖化の危機がひしひしと迫っていると、みなが実感させられるこのごろです。

さて、私が関東を離れてここ関西に移り住んではや一〇年が過ぎました。長の欠礼をお詫びする意味で近況報告をさせていただきます。

考えてみますと、八〇年代後半から九一年に神奈川県を去るまで、〇さんにはほんとうにいろいろとお世話になりました。

住み慣れた関東地方を後にしたのは、本業であるキリスト教牧師として、既成の教会に招聘されて移り住むことになったのではなく、差別事件の一応の解決を

見たところで、心身の疲れからとるものもとりあえず大阪へ移り住んだというのが実状です。夫と大学浪人生と中学生の三人を引き連れてのことです。一〇カ月ほどたったころ具体化するはずの既成教会への招聘も思いがけない横槍が入り、成立せず、やむなく開拓伝道をはじめることになりました。早いもので来春で丁度一〇周年を迎えます。

まず、この開拓伝道の様子を紹介いたします。はじめ住宅として借りた大阪府寝屋川市の長屋の一軒では、隣家との間がベニヤ板の仕切りですから讚美歌の声がやかましいといつてどなられ、薄い壁のすきまからその同じ人の吸う煙草の煙が入ってくるのでやむなく他所を探すことになりました。後のちのことを考えてJR環状線の周辺をあたることにし、優に一月月二〇件以上の周旋屋巡りをし（大阪ですら本名を名乗って家を探すのはまだまだ難しかったです）、やっとの思いで文化住宅を借りることができて文字どおりたった一人で礼拝をはじめた訳です。そのころ、以前、神学書の朗読をお手伝いした盲人のかたが応援に現れ、特技の鍼治療をもって無料奉仕をしてくださり、開拓伝道の幅を広げてくださいました。間もなくして、そのIさんがハンセン病療養所との関係が深かったこともあって、瀬戸内海の三つの療養所、大島青松園（香川県）、長島愛生園（岡山県）、邑久光明園（岡山県）

を年一度の割合ですが、訪ねる機会があたえられました。そこで多くの在日韓国人患者とも出会うことになりました。国を離れ異国での厳しい生活の中で罹患した悲惨な病状にもまして、愛するものたちとの別離・隔離という苛酷な現実を生きて来た彼女／彼らとの出会いは衝撃的でした。そのときから以前にもまして人を外見ではなく存在の根源、魂のあり様から見るということの方が自然なのだとして少しは理解できるようになりました。

今年も先週、副業で勤めているキリスト教主義の高校からのワークキャンプに合流という形で牧会している伝道所の若い女子大学生ふたりと共に、上の三園を訪問して来ました。過去一〇年間のかわりの中でたくさんのことを学ばされ、感じさせられた大切な場所です。折しも国賠訴訟の勝利が報じられた後で、原告団に加わった人、考えがあつて加わらなかつた側の人たちが両方の考えも聞くことができ、有益な旅となりました。それにも増して印象深いのは数年前、盲目の韓国籍の女性の方を訪問したとき、わたしが在日韓国人の牧師と知るや、なんと「南北の統一はどうなっていますか」と尋ねられました。盲目ではあつてもチマチョゴリを着ている格好で片方の膝をたてて背筋を伸ばし凛とした面持ちで遠くを見ているようなMさん。少女時代になぜか故国を離れ異国に来て罹患し、園内で結

婚した夫とも死別し、不自由な体で過ごしているこの方が、そのような質問をして来るとは想像できなかったことでした。青松園は久しぶりですので、今回はどうしても現在の南北朝鮮の状況を伝えようと訪問したものの、彼女は加齢のため一人での生活が不自由になり、特別室に移され一日寝たきりになっている状態で会話は不可能と思われました。ところが一緒にたずねた若い神学生のSさんと看護学生のOさんと三人で民謡アリアンを耳のそばで大きな声で唄うと、彼女も一緒に唄い、続いてトラジ（桔梗）を二番まで歌うのです。それに指を振り振り指揮をしているような格好で幼いときに覚えた童謡もつづけて歌い、それは何度も何度も繰り返しました。それも笑いながら「主人は音楽の好きな人だった」と大きな声で言うではありませんか。寝た切りになつたまままで満面に笑みを浮かべつつ、幼い日のことや、一〇年程まえに昇天した夫のことを思い出しつつ歌いつづける彼女の姿に二人の若い人の前で涙を見せまいと必死の私でした。在日のSさんは父親の祖母の姿とも重なつたらしく目をしばつかせていました。ほんとうに名残惜しかったのですが、次は何時会えるかと後ろ髪を引かれる思いで病室を去りました。

裁判のことと言えば大島青松園の脇林潔さんという患者の方のお話しが印象的でした。若い人たちに向

かつて彼が配つてくれた『生への理解』というプリントから一部紹介します。

『ここでの話題と云うのは皆さんも既にご存知の「らい予防法」違憲国家賠償請求訴訟事件を巡る話です。去る五月に熊本地裁でその判決がありました。以後、被告と国側の上級審への控訴断念があり、それで裁判は原告側の全面勝訴と云う形で確定になりました。

そしてこの結果を受けて、既に国側は、国の過去の政策の誤りを認め、謝罪され、元患者全体を対象に賠償金の賠償を含む、人権・名誉の回復、福祉の措置が取られつつあります。

そう云つたことで、俄に私たちを取り巻く周囲の状況はこれ迄にない早さでの変化が起こりつつあります。（中略）人の悲しみ、人の不幸は、人の自他の関係に由来し、人の生の有り様に起因しているでしょう。より多くを求める功利的な人間の存在が、力を求め、依存・利用関係に人を導き、その力の偏向で、自他の関係を自らが歪めるといふ不幸、破壊的・攻撃的な争奪関係にまでそれを歪めてきたものでしょう。

私たちの生への理解と愛を欠く行為は、この様に自他の相互理解を阻むものになっている。そうではないでしょうか？

結局、人の幸せは、幸せに繋がった人の行為でなけ

れば、人の幸せはないでしょう。幸せは奪い取るもの、聞いとるものと云った様な態度や活動行為では本物は得られないでしょう。自他の人の全存在的な理解は、同質同量の人の全存在的な理解がそこになければならないからでしょう。

今回のハンセン氏病者の国賠訴訟事件も、圧力で要求を相手に飲み込ませねば済まなかった不幸があるでしょう。要求の善し悪しに関わりなく、憎しみに基づく不自然な人の行為は、不自然な行為しか得られない。表面上の全面解決が約束されても、その約束は人の幸せに堅く結びついているものとは決して云えないからでしょう。誤った手段は、その目的をも誤らせるものでしょうから……。(中略)

人が幸せにその全てを生きる為には、ですからそれに値する“真に生きる為のもの”が各自において見出されなければなりません。

それはまた通り一片の知識・観念や概念と云った表面上のものではない、一人一人の生命につながったものでなければなりません。

それを可能にするものは、生なるものへの理解(愛)の他にはないでしょう。一つの全生命体としての統合を阻んでいる、人の様々な立場を超え、知を超え、あらゆる人と人との垣根をとつばらうものは、これ以外には考えられないからです。

どうか皆さん各自で、人に起こっている生の現実からこの事を検証してみてください。現実回避や逃避の過程でなく、人の生の現実を理解する過程においてそれを見出してください。(以下略)』

淡々と語る彼の話の内容は、高等教育を受けられなかったにも関わらず、哲学書を読みあさった訳でもないのに、私が若い日に影響を受けたマルチン・ブーバーの「我と汝」の思想、エーリッヒ・フロムの「生きるということ」(原題・To have or to be)の内容のエッセンスをそのまま、ご自分の苦難多き人生で悟ったこととして言い表していたのです。受難の中で鍛えられた活きた思索の人という表現がぴったりのひょうひょうとした七〇代の方でした。看護婦さんたちも彼の語ることに耳を傾ける機会があるそうです。世話を受ける人、面倒をみてあげる人という図式にはまることの危険に警鐘を鳴らす役目を負っているのでしょう。在日韓国人の指紋捺捺反対運動や人権回復運動の過程で私を感じさせられたこととダブってひとつひとつ共感するものがありました。

この数年の間、机上の学問、それが哲学であれ、神学であれ何学であれ、人の命を生かす愛の行動(祈り)に移されなければ二一世紀では意味がないのでは、と痛感させられていました。また、真の思索家は静かに

隠れたところにおいて、大衆の称賛の中にいないという記述をどこかで目にし、今回脇林さんに会って、いまや地球の存亡はこのような人の存在に大きくかかっていると再確認させられた瞬間でもありました。また、私たちも同様に、置かれた場所で命(愛)につなげる行動をする思索家にならねばと襟をただす気持ちになりました。

邑久光明園でたずねたCさんも「賠償金(補償金)が一〇〇万円程もらえると云つても、園の外の人なら大きなお金だが、私たちが外で暮らそうと思つても家一軒買える訳でもなく、中途半端だ。僕はここで過ごした六〇余年の自己史を書いて本を出そうと思う」と言っていたのが印象的でした。

開拓伝道の報告といいながらハンセン病の方々の話に逸(それ)てしまいました。でもあらゆる問題が凝縮して存在しているところですので、自分の人生の課題を客観的に観るといふ点でも、大いに考えさせられる経験ですので、このことは忘れられないのです。

開拓伝道をはじめ七年前は落ち着いて礼拝するところもありませんでした。公民館、ある人の会社の事務室、喫茶店、クリスチャンセンターの一室、時間をずらして他教会を借りるとかで、転々と渡り歩いた天幕生活さながらの歩みの結果、二年半前に、今の地の

利のよい場所が与えられました(JR、地下鉄、近鉄鶴橋駅の近く)。求道者として伝道所に来ていた在日一世のハルモニ(おばあさん)が心血を注いで手に入れた小さな古いマンションが、死後残されたままになつていました。その一階を息子さんが、私に「教会として使つて見ませんか」と申し出られたことから事は始まりました。相当な年月、空き家のままでしたので痛みが激しく、そのままの使用は断念し改築ということで礼拝堂らしく造りなおし、安い賃貸料を払っています。普通の住宅の居間くらいの広さですが、念願の中古のリードオルガンも置くことができ、小さいながら厳粛でいきいきした礼拝を守り、礼拝後や週日の談話の部屋として使っています。改築のための全国募金を募った際にはOさんにもお世話になり、ほんとうにありがとうございました。

現在、日本人、在日韓国人、ニューカマーと言った多種の人たちが一〇数名ではありますが礼拝に集い、良き交わりを保っています。

昨日のことでした。在日一〇数年の信徒の人が最近大阪に来たニューカマーの人を歓迎する意味で、近くの下町、鶴橋国際市場の中にある韓国カラオケの店に私も来るようにとの誘いがあり、行って来ました。私にとっては生涯で五度目のカラオケでした。韓国でも

相当田舎に行かないと見つからないであろう古びた長屋形式のアパートの二階入り口にある店、歌は韓国語（もちろん日本語訳詞つき）のものばかり、それも一九八〇年代前のものがほとんどを占めています。来ているのは在日の中年の夫婦を交えた在日朝鮮人（総連系）、韓国の歌大好きという日本人の大学教授とその友達などといった顔触れでした。二〇年近くの開業で一〇余年も続けて来る家族のような客たちが主で、飲食物も置いてあるところから自分で取り出し、カラオケの音楽も旧式のレコード、これも客が自分でかけ、勘定も自分でこれくらいだろうと見積もってお金を置いて行くようになっていました。ママと呼ばれるおかみは七〇歳直前、一〇年前に在日でかなり名の知れたドラマードだった夫と死別したが子供はなく、幼い時におぼえた韓国民謡を自分もチャンゴをたたきながら、時には踊りながら唄って、決して儲（もう）かってはいるように見えないうらぶれた店を経営しています。しかし、その歌いっぷりは洗練されていて、日本生まれ日本育ちとは到底思われない程でした。連れて云ってくれた人の解説、「ある時代がそこで止まったままの店」そのものでした。夜一時には閉める店で、いつものことらしいのですが九時頃からはママは客の前で堂々とうたた寝していました。この方に出会って知らされたのは、在日韓国女性として積もつ

た恨（ハン）を自ら解きつつ、他者の恨（ハン）晴らし（プリ）も助けていることでした。夏の暑い夜に期せずして経験した貴重で不思議な出会いでした。

これは私の開拓伝道の一面を紹介したのですが、実際既成の教会ではなかなか経験できないことも（!?）しばしば体験させられています。集って来る人たちの中には心病む人、または心の病を持った家族を抱えている人が半分以上です。在日韓国人としての私自身もご多分にもれずアダルトチルドレンでありますから、他人事とは思えず、共に考え重荷が少しは軽くなるよう週日も一緒に行動するようになり、聖研祈禱会も要望に応じて一對一のカウンセリング形式に行っています。年齢に関係なく深く人生を考えつつ生きている人たちです。教えられることがたくさんあります。それと、若いときに希望した韓国留学は実現しなかつたとしても、なぜかハンゲルとの関わりが続いて、今も非常勤で高校や大学でも教えるという副業が与えられ、この縁で新しい出会いが次々とやってくるのは幸いです。感謝しています。

おなじキリスト教界でも乙教団から女性差別・政治的圧力によって追い出され、やむなくというより必然的に出身教団であるN教団に属するようになって今にいたったのは、すべてが無駄でなかったといえましょ

う。その間〇さんたちのはじめた「フェミニズム・宗教・平和の会」がどれ程支えになったか分かりません。

カソリック教会とも幼いころ縁があったと「女性と宗教の近代史」でも紹介させて戴きましたが、プロテスタントの女性牧師としてイエスの母マリアについての考察は避けられないもので、一〇年程前にあるキリスト教系雑誌に載せて戴いた「受胎神学」は私の牧会、神学の基盤となっています。プロテスタント教会が女性性を蔑（ないがし）ろにし、そのことが聖霊のいきいきした息吹を教会内で抑圧してしまつたことも否めないことであります。幸いこの小さな伝道所に集つて礼拝を守り、交わる群れの中に、学問的な著書を残した人がいるかといえば、牧師の私が身元保証人にならなければ何事もできない天涯孤独の人もいるという幅のひろい層が集まっています。ですから、もつとも小さい者に現れる神性とはどういふものなのか絶えず考えさせられています。人はこの世の肩書や地位、名声、財産で人から認められ、それでこころ安らかになるというのは幻想で、自分の魂のありようこそ最も大切に確かなことであることを気づかされているようです。

ちよつと長い手紙になりました。はしよつた云い方ですが、結論としてこの一〇年で私が得たものは「自分の人生に恋をすること」のすばらしさです。副業の

ひとつにキリスト教主義高等学校で高三に聖書に基づいて「人生と愛」を説いているせいでしょうか、若い人に影響されてなのか、今が一番良い時と思えるのも幸いです。一九九六年に三〇年ぶりに出会つてふたたび五年経た今年に再開された神学大学のクラス会でも、生意気にも「人生これからよ」と同期の男性牧師たちにはつばをかけて来ました。キリスト教の牧師として不遜な云い方だと思われませんか。もし、そう思われたらお便りをください。なぜ私がそう思うのかお伝えしたいと思います。

一昨日の小泉首相の靖国参拜でこの数日あつた議論が沸騰しています。私は日本とアジア、世界との真の友好を願う人たちの思いが、自分をこころから愛する生き方から発するものならば、この国には希望があると信じています。

残暑きびしい折り、ご自愛くださいませ。

二〇〇一年八月一日

申 英子（シンヨンジャ）より

タイの女性について私の思うこと

勝又 美保

いやはや、この国に移り住んでから五ヶ月が過ぎました。「フェミニズム・宗教・平和の会」会誌原稿としましては、タイの女性やタイの宗教事情について、ある程度のデータを備えた上、記載させて頂くべきなのではないかと、元来怠け者の私は、この度も勉強不足のため、それはできません。ですので、お恥ずかしいことですが、本当にぎつくばらんに、私の見聞範囲での「タイ」の女性についてのイメージ／感想をまとめるのみに留めさせてもらいたいと思います。

さて、前置きとしてお話ししなければならぬことがあります。それは、タイという国について述べる場合には一人のタイ人にある事柄を聞いて、それをタイ人の平均的考え方として安易に受け入れることはできないということへの注意です。これは、本当におもしろいことで、一つのタイに関する質問を数人のタイ人にするると本当に様々な答えが返ってきて、なかなか事の様相がつかめないことがよくあるのです。ですから、私がこれから、お話しするタイの女性についての事柄は、全てのタイ人女性に必ずしも当てはまることではないので、常に「この階級については……」という但し書

きが必要になってくることと思います。この点は、私は日本とは大いに異なることであると思っています。

タイには色々な人々が住んでいます。同じ「女性」について述べる場合でも、本当に色々なタイプの女性があります。家にメイドさんがいて、専業主婦であつても、家事をする必要がなく、日本の「教育ママ」以上に子育てに熱心になつてしまう女性。夫の収入だけではやっていけないため（データのわからず申し訳ありませんが、このタイプの女性が大半、少なくとも私の周りには多いです）共働きに忙しい女性。とはいえ、タイの男性は日本人男性よりも家事には積極的で働く女性も夫と協調しあつて家庭を築きあつているように見えます。それから、とても多いのが中国系の人々です。彼らたちは、二世以降はすっかり表向きはタイ人なのですが、それでも一歩家の中に入ると言葉こそはタイ語ですが、一般のタイ人とは全く異なつた中国の伝統を保っているようで、男尊女卑的などところがあるようです。モスラムの人々もいます。元々タイの南部に多いようですが、チェンマイにもベールを被つた女性たちがよく見かけられますし、モスクもあります。（中国系の人々に対する差別はないですが、モスラムの人々と一般のタイ人との衝突はあるようです）そして、貧困層。親に売られてしまう少女、あるいは山岳民族（この人たちは、祖先がずっと昔からタイに住ん

でいるのにも関わらず、タイ人として認められる「ID」を持つていないために差別されています）又、売春婦、バーで働く女性たち。そして、所謂「レディー・マン」あるいは「おかま」（こういうた用語は日本語では差別用語なのでしょう？私には今、多くのそういった友人たちがおり、彼らが自称していますのでこの呼称を使わせてもらっているのですが）にもかくにも、「セクシャル・マイノリティー」と言われる人々がとても元気に生活している国です。特にチェンマイが都会のためかもしれません。（日本ではなかなか「おかま」の人たちは普通の職業にはつくことはできないと、「おかま」の日本のおじさんが言っていますが）、性転換したことがはつきりとわかるような人たちも確かに普通の（所謂昼間のこと言う意味での）職業についています）

さて、このように多様なタイの女性たちなわけですが、あえて、一言でタイの女性はどうかと私の印象を述べさせてもらおうと、それは、比較的タイ人女性は日本人女性に比べるとずっと、あるいはアジア人の中でも（勉強不足の私はこの「アジア」に関しての断言は避けたいのですが）秀でて自由で独立心旺盛であるということだと思います。タイ人男性の浮気・買春は大変有名で、妻の苦勞話などはよく聞かされますが（思ったより離

婚が多くびつくりしています）、それでも、夫は共働きをする場合、家事に積極的なケースが多いです。欧米人の目から見ると、まだまだのようですが、日本人の目から見るとそう思ってしまう。タイでは、よほど裕福でなければ、専業主婦になる余裕などないわけですから、昔から共働きが多かったようで、夫婦が助け合うということは当然昔からあったようなんです。近代化が役割論を生んだという理論がここで見えてくることかと思えます。そして、タイの女性というのは、これは女性に限らないことですが、とても気が強いです。「マイ・ペン・ライ」（「気にしない」という意味）という言葉が始終響き渡っているこの国ですから、のんびりしていて、いつもニコニコしているというのが典型的タイ人のイメージではあるのですが、絶対に議論などでは引き下がることなく、一緒に働いていて本当に疲れ果ててしまうような人もいます。特に私の学校は女子高で女性の先生が九割近くだからかもしれません、もう強い女性でいっぱいです。しかし、一方で「良い女性」のイメージという点に関して考えると、タイのほうが日本よりも堅いところがあります。例えば、タバコを人前で女性が吸うと本当に悪いイメージがあるようですし、大酒のみも（特に女性教師は）社会的にはあまり許されないようです。それから、今の三〇代がどうも分かれ目らしいのですが、

「女性は処女で結婚しなければならぬ」という風潮がまだ根強いのです。けれど、こういうことを二〇代以前の人たちに言うとうどうも笑われるようなのです。とはいえ、先述したように、この傾向というのでも聞く人聞く人で様々であり、二〇代でも堅い職業についている人などは（特に教師など）貞操を重んじている様子です。

さて、私の学校にも様々な女性たちがいます。家庭を持つている先生と独身の先生が半々ぐらいの割合ですが、独身の先生たちは、一見して生涯教育に身を捧げるタイプのような人たちに見え、「なぜ、独身なの？」と聞いてみると「縛られたくないから。自由でいたいから」という答えが返ってきますが、実は独身の理由はそれに限らないようで、所謂「レズビアン」がたくさんいるということに最近気付きました。（決して偏見の思いで言っているわけではありません。もしそう聞こえてしまったらすみません。うまく表現できずに……）そういうわけで、最近本当に美人で素敵な先生たちが独身でいる理由がわかりました。（というとはたまたフェミニズム的ではありませんね。重ねてお詫び申し上げます……）

とにかく、この国は一女性の感想としましては、本当に女性にとって住みやすい国です。無論、自分が外国人であるという例外があるからなわけですが、少な

くとも私の年代の女性（三二歳）が独身であるということに対して何らプレッシャーもなく、独身であつても一人前の人間としてみてくれることが一番嬉しいことです。私の育つた環境がとくに保守的だったからかもしれないませんが、日本にいと、そうはいきません。

ということとして、私は一女性として本当に新しい発見の毎日であるタイでの生活を楽しんでいる幸せ者です。もちろん、この国には色々な問題があり、あまり美化しすぎではならないと思つています。そういった問題に敏感になつて、これからもこの国の良い部分と悪い部分をも客観視し、何か私でできるお手伝いがあれば一杯させてもらいたいなあと、この国を愛するゆえにちよつとロマンチック主義ながらも考えている私です。次号では、宗教のことについて書いてみたいなあと思つています。

新しい生活の近況

江口みりあむ

私は今年の三月に、三一年間の日本滞在を終えてカナダのバンクーバーに移りました。トロント生まれ、トロント育ちの私にとって、西海岸に住むのが初めてです。バンクーバーには、以前から知っていた人々がほとんどいなく、娘夫婦と赤ちゃん、高校時代の友達一人、そして日本から一緒にきてこちらの大学の寮に住んでいる下の娘だけでした。三二年間一緒に暮らした夫と別れ（正式な離婚はしていない）、生活環境を変え、安定した仕事もないのに、私は二年ほど前の計画段階からこの大きな一歩を甘く考え、無理なく移行できるとばかり思っていました。何と非現実的な私でした。この四ヶ月間、精神不安定、経済的な不安、こちらの人間との付き合いがたへの不慣れからくるストレス、等々に圧倒されそうになったり、パニック状態になったりの繰り返しでした。でも、絶対にこの時期を乗り越えて強くなりたいという願望を捨てずに、神様との対話的關係も続くことによつて、絶望することだけは何とか避けることができました。

悪夢のようなこの体験のなかで、支えとなったの

は、信仰と、子供たちの愛情と、友人たちの励ましと、そしてここで見つけたユダヤ教の教会です。教会に積極的に参加するのが生まれて初めてです。Jewish Renewal（改新ユダヤ教？）という一九六〇年代以来の新しい宗派で、少しずつ欧米やイスラエルで広がってはきているものの、まだあまり知られていないようです。（長い歴史をもつ Reform 「改革派」とはまた別です。）考え方としては、ユダヤ教の伝統を尊重しながら、そのなかの排他的・差別的なものを取り除き、新しいものも取り入れていくことです。他宗教、ニュー・エイジ文化、フェミニズム、エコロジーや環境主義などのさまざまな考え方に心を開いて、創造的な宗教生活や責任深い社会参加を目指しているの、私にぴったりの仲間です。人数的には、男女が同じくらい参加していますが、フェミニズムの考え方を本当に積極的に取り入れているのがこの宗派の大きな特徴の一つです。すべての面での男女平等はもちろんのこと、女性のリーダーシップが目立ち、昔から現在までのユダヤ教社会の見出しにくい女性史を探ることも重視しています。私の家からちよつと遠いですが、土曜日の礼拝に参加し、その後みんなで昼食しゆつくり付きあうのが、待ち遠しい毎週の楽しみです。

アーミッシュの生活から考えたこと

野本千津子

一〇年近くも前のことだが、ペンシルベニア州のラ
ンカスターを訪れる機会があった。アーミッシュの居
住地として有名な所なので、偶然、馬車に乗って通り
過ぎるアーミッシュを見かけることもあるし、ショッ
ピングセンターでは、さまざまなアーミッシュグッズ
が売られていた。一度、大通りでアーミッシュの馬車
の後を自動車で走ったことがある。馬車の後を数台の
自動車クラクションを鳴らすでもなく、のろのろと
走ったが、馬車はほどなくウインカー（！）をだして、
銀行のほうへと曲がって行った。文明社会から遠く離
れた地域でならば、先祖伝来の生活形態を営む村落は
いくらでもあるだろうが、アメリカという先進国で、
その信仰に基づいて、独特の農業共同体を形成してい
るアーミッシュと、それを可能にしているアメリカと
いう国にたいして興味を覚えた。

昨年、アーミッシュに関して調べる機会があり（勝
手に調べた）、専業主婦として、また母として考えさ
せられることがあったので、そのことを書いてみたい。
アーミッシュにとって農業は、単なる生活の糧を得
るための手段ではなく、信仰の実践である。類こ干し

て土を耕す行為が、神から人間に与えられた仕事と考
えられ、一九五〇年代までは、農業以外の仕事につく
ことが禁止されていた。トラクター等の機械の使用も
禁じられているので、大規模農場は発達せず、小規模
な家族経営の農業が生活の基盤である。また、生活必
需品の多くを家庭内で生産するので、現金消費も少な
い。アーミッシュの家族は、三世代四世代同居の大家
族ではなく、核家族である。結婚前の男女の交際は、
人生のパートナー選びであるので奨励され（離婚は禁
止されている）、大半が二〇代の前半でほぼ同年齢の
異性と結婚する。男女差別の歴然とした共同体だが、
一方で、夫婦のパートナーシップの重要性も感じとれ
る社会である。

例えば、アーミッシュのある父親は、「スポック博
士の育児書」を読んで、母親のみが養育者として描か
れているのに驚き、「父親は、稼ぎ手ではあるけれど、
家族の一員としては存在していない」と感じる。養育
者としての父親の役割は、アーミッシュの社会では重
要である。生きる手段であり、信仰の実践でもある農
作業を、幼い頃から息子たちは、日々父親から学び、
同様に、娘たちは母親から料理や裁縫、野菜作りなど
の作業を日常的に学んでいく。アーミッシュの家族は
子供の労働力を必要としているが、日々の労働を通じ
て、子供共は、家族のために役立つてゐることを実感

する。また、アーミツシュの女性達は、自信があつてたくましく、目的意識と自尊心を持つている。家長長制社会で、重労働の日々を送りながらも、自らの立場に満足しているのは、農場の経営に妻の労働力が不可欠であり、また、妻の家事能力が、現金消費を減らす上で大きな働きをなすことを、夫だけでなく共同体全体が正当に評価しているからである。自給自足的な生活の中では、夫の労働も金銭に換算されないので、家事労働の換金性のなさが問題にならないのである。

しかし、ここ数十年來の産業化、都市化のため、アーミツシュの居住する田園地域でも、地価が高騰し、農地が減少し、加えてアーミツシュ自身の著しい人口増加のため、農業では生活が難しくなつてきている。ランカスターでは、アーミツシュ人口の三分の一が、農民ではなく、インディアナ州のある地域では、農民より工場労働者の人口のほうが多いという。

アーミツシュにとつて、工場労働者であることの第一の問題点は、父親が日中家庭を留守にし、母親のみが子供と共に家庭に残されることである。アーミツシュの工場労働者は、仕事に自らのアイデンティティを求めることはなく、他の労働者階級の間と同様にただ賃金を得るためだけに働いている。

私は、こういつたアーミツシュの家族や、労働に関する考え方を読んで、目からウロコの思いがした。

一九八九年にジョージ・ブッシュ前大統領がランカスターのアーミツシュとメノナイトを訪ね、彼らが伝統的な家族の価値を保つていることを称え、アメリカ人のロールモデルであると述べたそうである。アメリカの伝統的家族の価値というのがどういふものなのかは良く知らないが、私たち日本人が戦後、家族のモデルとして採用したのは、アメリカ的核家族ではなかったか。たくましくて、やさしくて、有能な稼ぎ手でもある父親と、ときばきと家事をこなし、美しく家を整える、料理上手な妻。学業もスポーツも優秀な子供達と。しかし、アーミツシュの家族論からすれば、すなわち、ブッシュ前大統領が褒め称えた伝統的な家族の価値に照らし合わせれば、夫／父親が日中、妻子と離れて働くことが、すでに家族にとっては危機的な状況だったのだ。郊外の主婦の憂鬱もこれでよく分かる。さらに進んで、夫のみならず、多くの妻が家庭を離れて、会社等で一日の大半を過ごし、家族とは別に仕事のなかにそれぞれがアイデンティティを見出し、子供達は学校で高等教育ならびに職業訓練を受ける現代社会では、伝統的家族の価値が機能しないのは当然であったのだ。

さて、戦後の日本では、アメリカ輸入の核家族のアイディアに加えて武家社会の要素が加わり（と、どこかで読んだことがある）、七人の敵と日々外で戦つて

いる夫のため、環境を整え、影で支えるのが妻の役目となった。夫の方は、会社という主君のもとで長時間労働を余儀なくされ、会社がらみのアイデンティティを発達させた。夫たちの労働力の換金性が高いのに比べ、妻の家事労働は換金性がないので、「働いていない」とされ、さらに、安くて手軽な商品が出回り、妻たちの労働の成果である加工食品や衣類（俗に言う「手作り」）の価値と必要性は下がった。電化製品が普及し、家事労働は飛躍的に楽になり、半失業状態の専業主婦が増殖した。いまや、石原里紗氏が、「専業主婦」を「家畜」と呼び、「手作り」の作業を「趣味」と言い切るご時世である。私は手作業が苦手で、ガーデニングやパッチワークで美しく家を飾り、手づくりのパンなどの、味噌だのを作り、家事を楽しみながら、十分にこなしている人に、絶えず劣等感を感じてきたので、石原里紗氏の手作り趣味宣言には、その感性の違いにびっくりする。

繰り返しになるが、わたしは半失業状態の専業主婦の一人である。（専業主婦の全員が半失業状態なのではない。）最低限の家事はこなしているので、家畜程度には有用だろう。職種を選ばずと仕事がなく、気乗りのしないことを無理にしたくないので、ずっとぐうたらな専業主婦だ。（専業主婦の全員がぐうたらなわけではない。）こんな私が母として、子供に何を教えて

やれるだろう。私の知らないことを学び、私の体験したことのない職業につくであろう子供達に、人生の先輩として手渡せるものは限られている。目下の私にできることは、ぐうたらはいけないよ。”と反面教師になることだけだ。勤勉で働き者であるアーミッシュ女性達のつめの垢を煎じて飲みたい。

参考文献 The Amish Struggle with Modernity edited

by Donald B. Kraybill and Marc A. Olschan

その他

女と国家——観念による呪縛

B三つ巴の性（一）

河野 信子

若い女 排中律から離れようございます。

老婆 Aと非Aの間はない。というあれですか。

女と男の間もない。関係史といいながら、人間だけが対峙的だと思ふ形式論理学が支配しています。排中律にもすつきりはしたところがあります。混乱のきわみのなかで、疲れ果ててしまわないために、役に立つ

面もあるにはあるのですが、しかし、中間の性を染色体異常とかホルモン異常とかということではできません。

若い女 素粒子だって陽子・電子・中性子があるではありませんか。中性子を異常粒子という人はいません。三者の存在様式となっています。人による省察は、だんだん増加してきます。湯川秀樹博士のパイ中間子、さらに、クォーク理論ができて奇妙な振る舞いをするものが次々に示されています。何が究極の存在か、言い張るわけにはいかないときに、たかが三者の関連を、二者の関係のなかに変換させてしまうのは、論理の無理というものでしょう。

老婆 本誌30号での性染色体への言及から、この世は、女と男と、そのいずれでもない性が存在することを発想の起点にしようとしていなさる。男と女の二つの性が存在することは、多様化の起因となっておりましようけれど、「進化」といった階段モデルを私は使いません。

若い女 私も何が進化かといいたくなります。確かにヒトの脳は、三層構造（爬虫類の脳と古哺乳類の脳と大脳皮質）になっていて、大脳皮質は、現代の文化の多様性にまで来ています。しかしこの文化を「進化」といえるかどうかわかりません。多様化といっておきたいところがございます。

老婆 文化は、攪乱系から癒し系まで、雑多に並存していて、多くの共同体や民族が大事に育てているのも、半端な数ではないでしょう。私「文化は祭りに象徴され、文明は民主主義に例示される」などといった若い先生がたに大笑いされました。文化といった面から考えるときに、「進化」バンザイといっておられるかどうかは、遠未来の声を聞かねば、何ともいえません。相対論の迷路に足を踏み込んで狂い果てようともであります。

若い女 私が三種の性へのこだわりを語りましたとき、「XO・XXYなどの人びとは、生殖不可能なのだから、そのうちに人類から消えてなくなる」といった人があります。

老婆 ほう！最近のヒトゲノム解説を見えますとヒトの細胞一個あたり三〇億個の塩基構成のなかの遺伝子は、国際チームが三万から四万個、セラ社が二万九千個と発表していきましょう（『朝日新聞』二〇〇一年二月一三日、朝刊、西部本社版）。ヒトの遺伝子は、九三%までが共通、残りの七%に、差異があり個性があるとなっています。そこで女と男の性による個別性の組み合わせの数は、きわめて大ざっぱに三万の七%を二千とおいて（セラ社の二万九千を加味して少な目に見積もる）どのくらいの個別性を発生させるかといえますとこの二千乗にはありません

か。2の四〇乗で一兆を超えますから、世界総人口は2の四〇乗に達しないだけではなく、人類文明発生以後の御先祖さまを加えても四〇乗になりますでしょうか。二千乗とは、とほうもない数です。これは10の六百乗を越えます。いずれなくなるというには、残された多様性は、余りに多いのです。

若い女 性は二種類で中間はないとするのは、観念が呪縛力を持ったときのみ可能だと考えるところから、語りこんで行きとうございます。

付記 奥田暁子氏、岡野治子氏たちと私は『女と男の時空』全六巻の編集に加わった。この時期は、「女と男の關係史」に重点をおいていた。中間の性の存在に視点を置かなかったことに、内省をこめていま三種の性の存在学にわけ入って行く予定である。

男と女が

「混ざっている」のが共同参画か

——男のことも考えてあげよう、でいいの？

下村美恵子

女性センターで一〇年、女性問題学習の企画・運営に携わってきた私は、最近、地道な「女性問題解決」の取り組みにあまり目が向けられず、周辺に追いやられていくような風を感じる。「地道な」とは私の主観言葉であるが、女性差別に気づき、それを重要な問題として認識し、何らかの解決に向かう手立てを探る……そのための学習や情報を、内容と方法を考慮して、まづ女性に提供していくことである。

私が日ごろ目にする学んだはずの女性たちに限定しての話であるが、ジェンダーの視点をもつて行動し、発言しているのにはあまりお目にかからない。いつもこれはなぜだろうと問いながら自分なりの考えを結論づけると、そうした学んだはずの女性たちとの「接点」の持ち方に行き着く。これについては今回は割愛させていただが、性差別を克服しなければならぬという学習の成果を十二分に発揮できないような提供の仕方にも、問題があることははっきりしていると受け止めている。

「男女共同参画社会基本法」が一九九九年に成立したことはすでに知られていることだと思うが、この法律が出来てから以降、自治体の政策用語は「女性問題解決」や「男女共生」から「男女共同参画」へとつきり変わり、施設名も旧来の多数派だった「女性センター」から「男女共同参画推進センター」に変更して使用されることが多くなってきた。

それにもなつてこれからは「男も女もだ」「ジェンダーフリーだ」と言われるようになり、「女性問題学習もいけれど男性問題もね」「男女だから女性問題とは言わないよね」「ジェンダーフリーだよ」という傾向が一層強まってきた。(いろいろの全国の自治体の事業概要やアクションプランなども見ていて私はそう思っている。中にはそうは言っても依然残っている女性問題の解決を目指すことを忘れてはならないとうたっているのもあつてさすがというのものもある)

事実、ある区の幹部職員は「基本法が出来てから女性問題の位置付けは変わってきた。女性問題は男性にも女性にもかかわる問題と言われてはいたけれど、ジェンダーという視点で広く位置付けられて社会が動いていくということで、次のステージになった」と述べている。[2001/8/17 都政新報]

男女平等とか、性差別撤廃とか、女性問題解決という言い方だと、堅苦しくてトゲトゲしくて、もうそんな状態にはないと思つている大多数の人々には「権利主張するだけの」一部のキリキリした女たちの言い分のようにとられがちなイメージがつきまとうのかも知れない。女、女と言うほうも言われるほうも拒否感を抱く。

そこへいくとジェンダーフリーは「男女」というジェンダー」を問題とするし「フリー」になることなら悪い訳がない。これくらいの認識は持つていて当然というのが、庁内の幹部の必須知識になった。これが和製英語であろうとなかろうとそんなものには関係なく、これからは男性も巻きこんで生き方を考え直す機会になると、便利なキーワードとして重宝されるようになってきた：と私は思う。基本法の「おかげ」と言えなくもない。

基本法は女性政策に取り組まざるを得ない自治体の、首長や幹部職員に男女共同参画を認識してもらうに抛り所にもなつて、予算化の説得材料としても有効かも知れない。しかしとても危うい様相も見せ始めてきた。

まずジェンダーフリーが、「男とか女とかの立場ではなく、一人の人間としてどうなのかということをやつていくつもり」だとか「男でも庁内はお茶汲みをしている」ということで、錯覚されていく。だれもが同じ土俵で四つに組んできたわけではなく、女性には

まだ女性役割の頸木から自由になれていない現実がある。お茶汲みだって、接客用のお茶出しはほとんど女性がやっている。

しかも困ったことに、ジェンダーフリーは男も混ぜて考えることが必要だと「言う」人たちが、ただ男を「混ぜる」だけでいいと考えていることである。そこにはリストラだ、過労死だ、自殺者増加だと苦しむ姿をさして男も抑圧されている、男も大変だ、そんな男たちにエールを送ろう、応援歌を歌おうということなのである。そして男の料理、男の育児、男の介護…などを皮切りに、もつと男も身辺自立のノウハウを身に付けよう、女が担っている大変さを理解しよう、男もやらなければいけないよと、ジェンダーフリーなどというあいまいな表現をそこに重ねていくのが「啓発事業」だというわけである。

確かに今、男女という二項間の差別のほかに、男も女もいる強者と男も女もいる弱者の差別が（もつとも差別とは強者から弱者に行使されるものであるが）生み出されているから、弱い男を励まそうとする親切はそれ自体は悪くない。けれどもそれが限られた予算（税金）でする女性センターの取り組みだろうかと、はなはだ疑問に思う。

男たちの性差別への加担性、とりわけ近年はDVの加害を重要な人権侵害として、男たち自身に考えても

らうようにはなかなかなっていない。しかもそこにさえ女も「混ぜて」しまう。混ぜた女たちは「男が何を考えているのか知りたい」という動機で参加しているのが特徴的である。いわば好奇心だ。自分を別の立場に置いての「観察行為」のようである。男性向けの学習に混ぜた女たちの参加動機を聞くとそういうことだし、そうでなければ混ぜた女たちは男たちをどうしても「糾弾」しがちになるという、そこを見抜けないまま「活発な意見交換ができた」と喜んでしまう。

そもそも知れば知るほど「ジェンダー」はよく分からない。私たちは向こうから歩いてくる人物が、男か女か、不明な場合はそれをハッキリさせたいという心理が働く。ああ男か、ああ女かと分かるとそこで安心する。「社会的・文化的性差」など一つの符牒のよいうな言い方をして、人為的に作られた抜き差しならぬ強い強固なものであり、男らしさ・女らしさのことを言う：、ランドセルの黒と赤とか、ベビー服のピンクとブルーとか、そういう決め付け方は良くない、そうでしょ？という具合に了承されていくことだけでいいのだろうか。

「女性問題」から「女性と男性の問題」へという方向はいま始まったことではない。新たな女性問題や新たな男性問題をとらえる視点などを根底に据え、解決

しなければならぬことが根強く横たわっていることに努めて目を向けていかなければならないし、現状ではジェンダーを男女という二分法でだけ考えていることも問題だと自覚しておくことも必要だ。じっくりと現状や方向や今後を見定めることなく、いとも簡単に「ジェンダー」がもてはやされていくことも気になる。

だが男を「混ぜる」だけでいいと決めてくる攻し切れない「力」、そのような力に異義申立てしても、「これからは男も女もだよねルンルン」派にはなかなか理解が及ばない。男と女の「混ぜ方」「混ぜる意味」「混ぜない意味」を吟味しなければ、性差別克服の本当の道筋は辿れないような気がする。それでいいというのであればハナシは別だけれど。

六〇人の女性が集まったジェンダーに関する講演会に、義務で二人の男が混ぜたというのがつい最近あった。二人とも腕を組んで「寝ていた」が、彼らはこの話をどう聞いたか、とつい余計な心配がよぎったものだ。男女共同参画社会だから男も女も、ジェンダーフリーだから男も女もと主催者側は考えていたのだろう。これが時流だから話を聞いておこう、そういう設定のされ方のようにだったが、飲みたくない水はムリに飲まなくてもいいのに。

国連婦人の一〇年や女子差別撤廃条約批准以降、性差別克服は行政課題となって全国の自治体が何らかの

取り組みを始めるようになって二〇数年の今、男女共同参画社会とジェンダーフリーという二つの言葉の定着を進めたのも全国の自治体の女性行政によるところが大きい。だが本当に辛くて、困難な状況にあり、大変な思いをしている人たちのもとに、まだまだその二つの言葉は届いていない。届けようとしてもしていない。

新しくオープンした男女共同参画推進センターの担当から「男性向けにどんな講座をしていったらよいか」「男性向けに講座を組まなければならないのだがどうしていいか分からない」と聞かれたことがあった。男性向けにも講座を設定しなければならないという理由が何で、どういう必然性のもとで何をしたいと考えているのか伝わってこない。「世の中男女共同参画の時代だから」と言うだけで…。

自治体の女性行政、いや男女共同参画推進行政がどういふうに担われているか、住民のそれへの関心は極めて低いし、自治体でそれを推進していく「人」は残念ながらそうジェンダーの視点に関心を寄せているわけでもない。官主導のフェミニズムなんてもともとあり得ない話なのだからそう嘆くこともないか。しかし、自治体や男女共同参画センターとかに、どういう「人」がいるかということ、結構重要なポイントになる。つまりどういう「人」を配しているかである。これも施策の一つである。

有職女性と

専業主婦との対立を超えて

金子 珠理

オーバードクターも十年が過ぎ、現在わたしは大学の附属研究所の嘱託研究員というささやかな仕事に就いている。収入は給料と事業収益（青色申告分）を合わせても「一〇三万円の壁」にも満たないが、仕事の内容には満足している。これは「奥様の自己実現のためのお仕事」に分類されるのであろうが、わたしとしてはそのようなつもりで仕事をしているわけではない。できれば将来に備えて、厚生年金や健康保険にも入りたいと願っている。仕事量にかんしても一部の休眠状態の専任教員よりも多いのではないかと自負しているが、「均等待遇」を求めてユニオン活動する気も余裕もないのが現状である。

さて、わたしのところでは今年子どもが地元の私立小学校（とはいえ「お受験」とは無縁の学校だ）に入学したのだが、そこに学童保育が設置されていないために、学区の公立小学校内にある自主運営の学童保育（行政からの補助金は年間数百万程度で、残りは保護者が利用料を負担）にお世話になることとなった。三十年前の東京近郊の学童保育の様子を目にしてきた

わたしからみれば、学童保育が自主運営で細々と行われていること自体が驚きであるが、専業主婦率全国一位の奈良県にあつて、まだまだその需要が少ないのであろうか。おかげで保育園にも学童保育にも苦勞なく入ることができたのは、地方生活者のメリットである。ここではわたしが現在かかわっている「学童」に対する取り組みを紹介し、そこに有償労働・無償労働の問題、そしてジェンダーの問題がいかにかかわっているかについて考察してみたい。

新入生の親にとって一番の心配は、登下校である。交通安全はもとより、途中で具合が悪くなつたらどうしよう（携帯電話は禁止されているし、一年生だけでは機転もきかない）、そのとき悪い人に車に連れ込まれたらどうしよう（防犯の問題）、云々。京都・伏見に続いて、この六月に大阪・池田でまたもや小学生を狙った痛ましい事件が起こつてからは、特に防犯にがんばって心配はつのる一方である。登校は集団登校なので交通安全にかんじてだけいえば比較的安心であるが、問題は各学年によつて時間がまちまちの下校時である。現在わたしの子どもは徒歩三〇分の距離にある公立小学校内の学童保育まで歩いて通わねばならぬ。これが仕事のために下校の様子を見守ることのできない保護者にとつては心配なのである。そのために保育園時代のときのようにには安心して仕事ができず、

私自身も大変困っている。大阪の事件以降は、途中まで子どもを迎えに行く保護者（主として専業主婦）も多く見られるようになったが、乳幼児や病人などを抱えている家庭ではそう毎日出掛けられるわけではない。これら学童保育に通う児童や、乳幼児を抱えた家庭の児童は、いわば「弱者」であるとの認識から、私は校長や育友会（PTA）に相談し、また私自身もコーヒータ임을削って立哨や下校の付き添いを自主的に

はじめることにした（大学の研究職という自由な身分ゆえにできる行為として訝しく思う向きもあるようだが）。「学童」組は人数も多く下校の仕方に指導の余地があることから、学校の方では指導をかねてしばらくの間、先生方が「学童」まで引率して下さることとなった。育友会役員の有志の方々にも（男性も！）何度も協力して頂き、本当に感謝している。ところがこれに様々なクレームが寄せられたのである。各方面から伝え聞いたところでは「女性が勝手に仕事をしているのに、その子どもを特別扱いして保護するのは問題だ」との意見もあつたという。これは男性のものとも女性のものとも受け取れる意見である。無償労働者である専業主婦からすれば、有償労働者である有職女性のためにこれ以上の無償労働を提供するのは御免だという思いになるのはもつともである。たしかに両者、専業主婦と有職女性との溝は、一見したところ深い。だが、

両者の対立はジェンダー問題にからむ代理戦争というのが真相なのではないか。

そもそも立哨や引率といった無償のボランティアには女性がかかわるべきであるという暗黙の了解がある。多くの男性は仕事を口実にこの種の問題の土俵になかなか登場しない傾向にある。たとえば女性が有償労働（大方はパートであるが）をすることを、その場合には「わがまま」とみなされ、その上、無償労働も相変わらず肩にかかってくる。一方、女性が専業主婦を選択したのならば、およそ無償労働にかんするあらゆる面（家事・育児・介護等）の責任を担わされてしまう。こういったダブルバインド状況は女性に特有のものだ。このように、専業主婦は無償労働を二四時間体制で担っているために、さらに立哨や引率までとても手が回らないのが実情である。有職女性にしても同じ状況である。問題は、このような性別役割分業体制のために肝心の「子どもの安全」が実はないがしろにされてしまっている点である。ならばどうしたらよいのか。当私立小学校内に放課後のすべての児童を預かる施設を作るのが理想であろう。だがその前に、父親も含む全ての保護者が「子どもの安全」のために今何ができるのかをそれぞれが真剣に考えるべきなのである。その結果どうしても保護者だけでは無理と判断したのならば、近くの大学の学生から付き添いやパト

ロールのボランティアを募るなどの代案を探ればよいのである。専業主婦VS有職女性といった表面的な対立構造に問題を集約してしまうのではなく、「子どもの安全」を皆が第一に考えることによつて、今や性別役割分業の壁を崩すチャンスが到来していると思うのだが、いかがであろうか。以上

付記 私立小学校内に学童保育施設をもっているところをご存知の方がいらしたら、お教え下さい。

仕事

糸川 優

私は、現在、非常勤講師として留学生の日本語を教えています。仕事というテーマをいただいたとき、私の仕事とは何か、それを仕事というのか、という考えが瞬間、頭をかすめました。非常勤講師というのは、まだ途上であるという意識も自分にはあり、仕事を生業とするなら、週三コマほどの賃金ではどうい仕事と呼べないだろうという気もします。次に、いわゆる主婦業？と否定的に考えたとき、私自身が仕事という

ものを考える時の定義が間違っていると感じました。私の仕事について、賃金の有無で区別して語ることはできない、と思うのです。

以前は、普通にいう野心というものがありません。経済力というよりは、自己実現を目指していました。けれども、それは、自分の欲望に仕えることで、自分を神にしてしまうことだと教えられました。私は、この数年、ずいぶん砕かれ、変えられました。肉に仕えていたのだと教えられたのです。つまり、誰からも褒められるような立派な志にしたところで、自分自身の思いを理想とし、意志を通そうとするというのは、イエス・キリストを救い主であると告白すること、矛盾する、ということです。努力は誰からも奨励されることですが、それすら、自分の理想のために努力するのは正しくない、ということなのです。自分の理想を実現するために、必要などきだけ神を頼りにしてきましたが、それは神を自分の奴隷として仕えさせることだとわかりました。ほんとうは、神が奴隷なのではなく、私が主イエス・キリストの奴隷なのです。

このように私の中で変革が起こつてから、当然、仕事についての考え方もまったく違うものとなりました。神に仕えるあり方として、留学生に対する教育があるのであり（研究活動は事実上休業となつている）、また、それとまったく同様に、神に仕えるあり方の一

近況報告

櫻村 愛子

つとして、皿も洗うのです。私自身は、家事は、生きるためにしなくてはならない必要なことだと思おうので、夫も子供達もこれに参加しています。誰もがしなくてはならない、生活上のことについて、これを仕事というべきかどうかはわかりません。ただ、フルタイムでキリストに仕えていなくてはならない、ということなのです。その中で、ある時は、買い物をし、掃除をし、教材を準備し、採点をし、横になることもある、というわけです。学生たちのために粉骨碎身するのではなく、家族のために献身するのでもなく、自己実現や自己満足のためにがんばるのでもなく、ただキリストの栄光のために忠実になしていきたいと思うのです。そういうわけで、自己実現のために就職を祈ることはしなくなりました。

奴隷たちよ。あなたがたは、キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。人のごきげんとりのような、うわべだけの仕方ではなく、キリストのしもべとして、心から神のみこころを行ない、人ではなく、主に仕えるように、善意をもって仕えなさい。(エペソ6:5-7)

ご無沙汰しています。一度報告させていただいてより、三年前に豊橋に勤務(愛知大学)したためなかなか例会にも伺えず残念です。最近の私の活動としましては、いま共著を三冊抱えています。専修大から出る島蘭進先生たちの編集される本で「関係・集団・感情のポストモダニズム的共同性」という論文、京大から出る本で、北野武・ベッソン・「アメリカン・ビューティ」を論じたもの、明石書店から出る本で、グローバリゼーションとアイデンティティ・クライシスについて論じたものです。三本目を今大幅に改稿しようとして、短い夏休みをあくせくしております。翻訳では、多賀出版からこの秋に出る「精神分析とフェミニニズム事典」の訳者代表の一人として、いま最後の詰めにかかっています。最近のテーマは基本的に臨床社会学とカルチュラル・スタディーズで、同じ社会学でも宮台真司をのりこえようと若者のフィールド調査やテレビ番組の分析などしています。

「もてない女」は如何に

キリスト者であり続けたか(三)

——仕事篇——

金子（真鍋） 祐子

現在の私は「研究」をなりわいとし、フルタイムで食べられるようになってようやく三年になる。研究を志す者にとつてつらいのは、それをなりわいにしたくとも、パートタイム（非常勤講師）ですらすんなりとはいかないことである。また稼ぎのあてがなくとも、とにかく不測の投資を求められる点もきつい。過剰投資によつて経済的、肉体的、そして精神的に、いつもあつぷあつぷしている。なぜなら、こうして生み出された商品（＝研究成果）の需給関係は、出身大学のブランド・イメージやある程度のマーケティング分析には符合しても（たとえば私が属する社会学の業界では「宗教」と「女性」はタブーだ、とか）、あとはわけのわからない要因に左右されることが少なくないからである。

そして、たとえば「結婚」を経験した人が「ビビビッ婚」とか言つて、そこに何らかの経験則を聞きただしい、もてない男／女」を地団駄踏ませるのに似て、大学への「就職」を果たした人はたいてい「私は公募

だったから」ときれいな事を言うものなので、これまたほんとに業腹な話なのだ。学位取得後二年間、職にありつかなかつたことは前に書いた。すぐ上の先輩（男性）がやはり就職に難儀していたことと、女性には前例がない」という理由から、彼がとめていた技官のポストすら私には下りてこなかつたのだ。研究室ではしばしば、時には教授もまじえつつ、「どうしたら就職できるか」という話で盛り上がった。それは院生全体に共有された、けっこう切実なテーマだった。

ある日、「やっぱり履歴書の写真が問題だ」という話になった。多少お金をかけても有名写真家に撮ってもらい、場合によつては修正してでも、というのである。その時、留学生のひとりが隣でぼそつとつぶやいたのだ。

「真鍋さんはあと五キロ痩せれば就職できるのに……」

私はうつむいてしまった。周囲が凍りついているのがよくわかる。そして誰もあえて彼の言葉に反応しなうとしなかつた。「ああ、みんな（教授も含めて）心の中ではそう思ってたんだ」と、私はしらけた気分になった。どちらかといえば量産型の私に対して、誰もが「あなたに職がないのはおかしい」と憤り、同情してくれたものだったが。実は博士論文に取り組んだ三年間で、私は十キロ以上も太ってしまった。過食気味

になつたような覚えはないのだが、日に十数時間も机にかじりつき、時には飲まず食わずで徹夜もし……の生活では、運動不足になり、ストレスがたまつても仕方なかつたと思う。そうでもしなければやり遂げられなかつたと思うし、研究者としての私はたとえわが身がデブになろうと（気持ちの上では「骨身を削つて」だつたから）悔いはなかつた、はずだつたのだが……。

それというのも、「大学への就職には女性差別がつきものだから、就職までは結婚せず、同世代男性の倍の数は論文を書くように」という指導教授からの忠告をマジに受けとめた結果である。けれども容姿という付加価値が、研究業績という商品本体よりモノを言うという説が本当だとすれば、がんばつた私の三年間は人生の大誤算というよりほかないではないか。実際あれからほんの五、六年しかたつていないのに、私の周囲では教授があげた条件に該当しない女性同業者たちが、どんどんと先を越して行つてしまった。さらに打撃だつたのは、当の教授自身が実は「面食い」だという噂を耳にした時だ。原因がはつきりしない敗北感ほどつらいものはない。ここでもまた私は「もてる女」に法界恪気するはめになる。

あくまで私の印象だが、「きつと教授たちが（大学院）入試のときに美人には手心を加えていたのだ」（小谷野敦『もてない男』）みたいな状況は、やはり大な

り小なりあると思う。それに、「私は働いている女で美人というのを、絶対に割り引いて考えることにしているのだ。……本人が好むと好まざるとにかかわらず、そこに何人もの男の手が加わっているのを、私は鋭く見つけ出す。彼女たちはいつも、特等席を用意されているのだ。そして本人たちは、男がしつらえてくれたその椅子を、あたかも自分ひとりで見つけたような顔をして座り込む」（林真理子『夢みるころを過ぎて』）といった不快な疑念を、実は私だつてひそかに抱いたりする。かつてはそれがため、あの三年間がひたすら呪わしく、世の中に対する背信感と不信感で、のたうちまわるような苦しみを味わつたこともある。

とはいふものの、今の私はことさら声を荒げる気にもなれないでいる。これらの指摘はたぶん真実をついてはいるだろうが、しよせん憶測でしかなく、またそういうした憶測に駆り立てるものはきつと「もてない男／女」の法界恪気、その負のエネルギーにほかならないと思うから。「研究者の市場は、美への投資（履歴書の写真にお金をかけることもそうである）による商品が取引されるミスコンなんかとは根本的に異なるはずだ」などと理論武装したつて、それは同じことである。なんだかそんなことに怨嗟の声をあげている自分の姿が惨めたらしく、そこにはイエスの言う「情欲をいだいて女を見る者」以上にイヤらしい女、目的をとげる

ためならば「情欲をいだいて男から見られたい」というへすけべ心が見え隠れするのである。これは就職における女性差別の現状がどうであるかとは別次元の、私自身の心の問題である。両者をごっちゃにして物事を判断すべきではない。

ある学会のシンポジウムの席上、研究者の倫理問題にかかわる話をしている、うかつにもへすけべ心」という言葉を五、六回くり返し、えらくひんしゆくを買ったことがある。ある女性研究者からは、「だいたいへすけべ」ってのは「助平」と書くように、もとは男を指す言葉なんだよ」と、あとで散々あきれられた。しかしあの場面では、男だろうが女だろうが、やっぱり私にはへすけべ心以外にぴたっとくる言葉はなかったのである。

研究者というのは多かれ少なかれ、対象を自己外化し、他人のあれこれをほじくり出しては（場合によっては「死者の墓暴き」も敢行する）分析とやらを施し、表象化する商売である。ことに人の生き死にを扱って飯の種にしている私には、時おり自分のやっていることが賤業のようにも思え、それでも許され生かされていることに肅然となる。にもかかわらず、いったん職を得てしまえばそうした感覚は鈍くなるし、かといって最も飢えていた就職浪人の時代には、いつそう情けないほどに卑しい自分であった。大学院生やODに

とって学会とは、先行投資された「努力」への対価を求め、目には見えない商取引の場に等しい。そんな中、あの留学生の発言が引き金となって、私は容姿と就職の関係について猜疑心を抱きはじめ、もてる女に嫉妬しては自暴自棄になっていたのだ。

その淵源にはパウロの言う「まず主に与えて報いを受け」（ローマ書二一章三五節）ようとす浅はかさ、そして貪欲の罪がある。また圧倒的な男性優位の社会である学会で、もてない女が抱く法界恪気とは裏を返せば、自分だって「情欲をいだいて男から見られたい」（↓結果、仕事面でおいしい思いをしたい、報いを受けたい）という凄絶なまでのへすけべ心」にほかならないのであった。これって、「男がしつらえてくれたその椅子を、あたかも自分ひとりで見つけたような顔をして座り込む」美人などより、はるかにタチの悪い罪業ではなからうか？しかもウェッティで惨めたらしいこと、このうえない。

さて、ここでひとつだけ引つ掛かるのは、「情欲をいだいて女を見る者は」とイエスは言うが、はたして「姦淫」は男性だけの罪なのか？ということだ。フェミニズムが告発する男性中心主義の偏向は、女性の権利だけでなく、罪の責任意識という側面にも見出されるべきではないかと思う。能動的であれ受動的であれ女にだって「姦淫」の罪はありうるし、たんに女とい

う理由だけで特別扱いされることも多い。『もてない女』だったはずの私でさえ、知らず知らずそうした恩恵に浴していたりする。ある飲み会の席で、知り合いの男性編集者が、わが夫にこう耳打ちするのを聞いたことがある。

「奥さんが本を出せたりしたのは、女だから得した部分もあるんだよ。若い女がひとりでもよくもまあ、異国で健気がんばってるなと思うと、なんとか力になってやりたい、ってなるわけよ。その点、キミは男だからきついだろうけど、へこまずにがんばってくれよ。」

そうだったのか、男もそれなりに大変なんだなあ、と思った。これは女性への逆差別であり、いいかえれば男性差別であろう。

私の目には、フェミニズムは女性たちの境遇のネガティブな部分ばかり取り出し、問題にしてきたようになっている。たしかに世の中のしくみは男性に都合よくできていて、そこに情欲の絡むことも少なくないだろう。しかしながら、「男がしつらえてくれたその椅子を、あたかも自分ひとりで見つけたような顔をして座り込む」のは明らかに共同正犯であり、そこに気づかないのはとんだ自己欺瞞である。そしてまたチャホヤされる美人たちを見てやつかむ私も、同じことを欲しているという意味ではこれと同属なのである。

いわれない女性差別を私は憎む。しかし同時に、逆差別の上にしつらえられた特等席にいけしやあしやあと座り込む無神経さも好きではない。その点をよくよく自己内省し、月並みだが与えられたものは感謝して受け、責任をもつてこれを全うし、成果を誇らない人になりたい。そうした上で、差別も逆差別もない社会になれば、と願う。「情欲をいだいて女を見る者は」のくだりは、女性に姦淫の罪への自覚を回避させたという意味で、今でも引つ掛かる聖書への不満である。

最初、私は『もてない女』という自覚が自分をなげあんなに苦しめたのか、その原因がわからず苛立っていたが、それは前記したパウロの言葉で相殺されたように思う。不信仰からくる我欲が自身の「すけべ」心を喚起し、法界恪気と自己憐憫の塊にしたのである。

男性優位の社会のしくみはそうそう変わることはないだろうが、ともかく心の問題だけは解決しておきたいのである。そこに不純物が混じっていると、その主張がいかに正義であっても説得力がない。それに、現状に今すぐ「勝つ」必要はなくて、ただ「負けない」ことが肝腎だと思っただけ。そうやって時間を重ねつつ、いずれこの私にも何らかの発言権が与えられるようになったら、その暁には堂々と「ブスのやつかみ」などとは言わず——異議申し立てができるよう、今は信仰による基礎胆力をつける時、などと考えている。

ついでに言うなら、あの留学生の言葉にならない「五キロ痩せたら」どうなるか、わが身をもってフィールドワークし、もてること^がの社会的意味が何かを脱構築すべく実証データをバンツと揃えられたなら、それこそ怖いものは何もない……はずである、きっと。

例会報告

なぜ日本にフェミニズムは

根づかないのか

—— 北欧視察や育児体験からみてきたもの ——

七月一九日夕、東京ウイメンズプラザにて例会が行われた。今回の発題者は育時連（男も女も育児時間を！連絡会）世話人の富永誠治氏。お話の概要は以下の通り。

◆はじめに

私の家族は保育士をしている妻、中一と小五の子供、そして私の四大家族です。夫婦別姓で、家事育児も夫婦の共同責任と考えています。渋谷区の職員をするかたわら、育時連の世話人、「子育てにやさしい社会を

つくろう全国ネットワーク」の世話人もしています。

◆ウーマンリブとの遭遇とその後

私は男尊女卑的な風土と言われる九州、熊本生まれですが、七〇年代初頭、TV番組でのウーマンリブの主張に対して反論できなかつたというか「あんなたちの主張まちがってないよ」と感じた、それがリブとの遭遇の始めでした。

私が公務員になった頃、労働基準法では「育児時間を請求することができるとあります。女性のみで男性は除外されています。私の職場では、私が組合の青年部長の時（一九七六年）男性の育児時間取得を実現させました。男性の育児時間取得が制度化されたのは一九七六年です。つきあっていた女性との結婚を考えた時、私はまず料理を覚えなければと独身寮で料理の独習を始めました。その彼女とは結局結婚後、性格や人生観の違いから離婚する事になったのですが、子供の親権や養育権をめぐることは、男は逆差別を受けます。子供は女性が引き取るものという司法の判断があるのです。私は養育権や面会権を裁判で争いましたが負けました。その後、今の妻と出会って再婚しました。一九九一年五月、職種を越え男女の枠を越えて育児休業制度ができ翌年施行されました。国会審議の時からぜひ自分も取得したいと思っていました。子供が生ま

れた時、妻の育児休業をバトンタッチする形で私は育児を取り、一カ月間で感じたのが育児に専念する事ができました。この一カ月間で感じたのは、性別役割分業の根深さでした。私の育児を知った時の反応が両極端なんです。職場では「男のくせに」という冷淡な目で見られ、逆に近所のお母さんたちからは「偉いわぁ」という称賛をもらってしまふ。自分としては当たり前の事をしているに過ぎないのに。その二つの反応の根にはやはり性別役割分業観があるのだと思いました。又、子育ては感動的でも楽しく面白いもの、育児は男にとっても権利なのではないかという事をつくづく感じました。子供と触れ合う素晴らしさから今まで男は遠ざけられてきた。母性、父性は関係ないのではないか。子育ては母がしなければならぬというのは神話です。子供を愛情深く育てられる複数の大人がそばにいる、それが子供にとって必要なのです。特に最近はいじめ、不登校、ひきこもり等、子供にとっても難しい時代ですよ。一人の親だけの力では解決できない問題の多い時代です。

又一方、育児を一人になう母親達の悲鳴にも気づきました。育児を取った時、私の様なケースが非常に珍しかったものですから、いろいろなマスコミの取材を受けました。新聞の全国紙にも載ったんです。その時インタビューに応じて「子育ての楽しさを知りまし

た」と言ったのに反感を覚えた女性達がいたんです。一カ月位育児をやった位で楽しかったなんて言わないでほしいというのです。自分達は孤立感、不安感にさいなまれ育児ノイローゼ寸前なのにと。母子密着の密室育児化というのでしょうか。何かそういう現実にある女性達のうめき声を聞かされた気がしました。

あれから十年程たち、この頃は社会の変化も実感します。外圧があつてしづぶという形ながら、まず女子差別撤廃条約、家族的責任条約の批准というのがありました。又、一九九六年頃からマスコミの論調も変化しました。家族的責任の男女共同化の流れですね。「育児しない夫を父とは言わない」というポスターが話題になった厚生省のキャンペーンなどもありました。男女共同参画社会基本法の成立も見逃せません。

◆ 北欧視察で感じた事

私がかかわる「育時連」と企業のキャリア女性達の作る「ヒープ協議会」の有志約二〇人で北欧の男性の育児休業取得と男女平等政策の実態調査に行く事になりました。一九九七年の事です。男が育児を取る割合は日本が〇・四二%に対しスウェーデンは三割、ノルウェーは九割にのぼります。実態調査ではノルウェーでは閣僚、大臣の約半数が女性。多くの女性が仕事をもち、専業主婦は例外的な存在です。長期にわたる女

性運動のひとつの到達点として一九九四年に女性議員が四一％に達した時のある女性議員の談話にこういうのがあります。「我々女性は七〇年以上闘いぬいてきた。今やつと機が熟した」つまり何代にもわたる女性達のたゆまぬ闘いの結果という事なのでしょう。ノルウェーでの男女平等法と各種関連法の制定を見て見ますと、男女平等法が成立し、男性の育児休業取得促進策（パイクオータ制）の導入があり、税制改革がありました。これは税をそれまでの家族単位から個人単位への移行するというものでした。そして子育て支援策の拡充、長期有給休暇、育児休業法、残業規制、といった施策が次々に打ち出されました。こういう話をする日本人は「それで国の経済競争力は落ちないのか」と聞いてきます。しかしむこうの人達の考え方は根本的に違うというか「国の経済の為に個人々人があるのではない。国民一人一人のために国や社会があるのだ」という考え方なのです。

さて、いろいろな人々の話を聞く中で最も印象に残った話をします。長い間フェミニズム運動をしてきたある女性団体の幹部にインタビューした時でした。「男女平等を実現する上で最もその役割を果たしたのは何ですか？NGOですか？政党ですか？労働組合ですか？」その人は私の質問の意味が分かりかねているようでした。もう一度同じ質問をすると、こう応えて

くれたんです。「いいえ、最も重要だったのは我々の意志、そして『希望』です」

◆なぜ日本にフェミニズムは根づかないのか

振り返ってこの日本を見てみます。まず戦後民主主義は自分達が闘い取ったものでなく、与えられた烽であるという事が大きいのか、日本人は主権者として未成熟なように思われます。依存的でお任せ主義。日本の女性は女性のおかれている現状に安住しているように見えます。それと男の立場から言うと家事育児を分担したくても男の長時間労働が解消されない限り、それは不可能です。労働組合が力を発揮すべきなのですが、日本の場合、企業内に労働組合があり、本当に力が弱いですね。ヨーロッパでは労働組合が企業別でなく職種別になっています。日本では労働組合なのに企業中心になりがちで組合員の要求をはっきり打ち出せないという現実があります。夫が企業に滅私奉公している限り、女性は仕事と家事の二重負担にくたくたに疲れて結局仕事を断念し、専業主婦への道を選ぶ事になる。日本では全国に千二百万人の専業主婦がいると言われています。それから日本の女性運動の低迷とこのがある。ノルウェー女性は一人が複数のNGOにかかわるケースが多いそうです。負担をシェアしあえるので闘いが続け易いという事なのか、日本の例え

ば労働組合内の女性運動家は私などが見てますと、何かすぐに戦線離脱してしまうんです。肝心な、闘い以前に仲間内で対立して結局やめていったり、何か女性運動家の簡単なあきらめ、逃避の姿勢が気になる所です。

◆最後に

一度しかない人生です。自分の人生は自分が決める。どうしたいか、どう生きたいのか、自分の意思をはっきりと持つてほしい。そしてノルウェーで出会った活動家のように、たたかいの中からこだわり続けてほしい。希望を捨てずに。

(この報告は千葉悦子さんがまとめてくださいました。)

編集後記

D・ウォルシュさんのメッセージ

「テロ事件で亡くなった多くの人々の悲惨な死をどうするのだ」というアメリカ兵士の言葉に見られるように、報復せずには死んだ人が浮かばれない(これは日本語)という感情にどう対処することができるのか。事件直後に『神との対話』の著者N・D・ウォルシュさんから出版社を通して送られてきたメッセージ

本日のこの一連の事件は、それぞれの人々がどのようなことに直面していたとしても、人類の一人ひとりが日々の生活への手を止めて…生命というもつと大いなる存在を深く熟考するための要因となりました。

人生の意味だけでなく、一つひとつの体験、そしてこれら一連の体験の意味をもう一度検討しなければならぬでしょう。

なぜなら、私たちがこれを創造したからです。

そして人類を新しく再創造するためには、どのような方法があるのかを、真剣にそして熟考して検討しなければなりません…

もう二度とこのような形でお互いを傷つけあうことがないように。

ダライ・ラマ十四世は、非暴力のみが国際テロ撲滅への道だと述べ、対米テロ事件に軍事力で応酬しないよう、米国に求めたという。ローマ法王ヨハネ・パウロ二世は、対米テロ事件がさらなる暴力への導火線となり、「憎しみと暴力の悪循環」が進む事態を引き起こさないよう、国際社会に訴えた。

こうした冷静な訴えかけがちらほら聞こえ始めている。しかしアメリカでは報復を求める声が過半数を占める。こうした時、宗教の無力さを感じみじみと感じてしまう。戦争反対の主張が宗教的信念から出てくることもあるけれど、あくまでそれは少数者にすぎない。亡くなった人や残された人の無念さをどのように解消し、他者の命を軽く扱う人々に対して何をする事ができるのか。さらには、戦争を肯定する人々をどのようにしたら抑えることができるのか。

この美しく、そして素晴らしい不思議に包まれた世界を保ちながら、怒りと憎しみを取りのぞくために、私は何ができるのだろうか？

ウォルシュさんの求めるものを見つけていることは難しい。難しいがために安直な対応へと流れていってしまうのだろうか。

(小松加代子)

ワールドトレードセンターが爆破された。

ミーハーで物質的だった私は、(ミーハーは変わらないが、物質的の部分は、現在は少し減少していると思うので過去形) ニューヨークが好きで、ワールドトレードセンターもロカフェラーセンターもクライスラービルも好きだった。アメリカの消費パターンや拝金主義は嫌いだ、私の友達は消費的でも、拝金主義でも無いし、決して銃を持たない人ばかりだった。だから、懐かしいニューヨーク。

ビルに飛行機が突入した映像を見たあとは、新聞の記事もテレビのニュースも見るのがいやになった。事件の悲惨さに加えて宗教がからんでいると思うと、今、日本という風土でキリスト教徒として(加えて女性としても。これは事件と関係ないが) バタバタ苦しんでいる私に、この事件はもつと苦しくなったから。

しかしまた、昨年イスラム教の人と話した時、自分の宗教を冒瀆する人は殺されても仕方ないと言われ、話が全く通じないことに絶望したことも思い出した。

テロは絶対に許されない。しかし、報復としての軍事行動に殆どの米国民が賛成しているというように報道されている。ベトナム戦争は忘れられたのか。しかし、この二、三日の新聞を読み直すと、アメリカにも幾つもの反戦の動きもあることが報道されていた。同

時に「アメリカに死を」「ビンラディン万歳」というパキスタンのデモの写真も載せられていた。

反戦の記事の一つを読んで泣いた。ニューヨーク、フオーダム大学の社会学教授、O・ロドリゲス氏(59)の一人息子、グレゴリーさん(31)は、ビル北棟一〇三階で働いていて、事件後一週間以上も行方不明だそう。以下は記事からの引用。「あまりの悔しさに『報復を』と思うこともある。だが『戦争反対』という信条は変わらない。ブッシュ大統領あてに手紙を送った。『息子の死を口実に他の国の人々を苦しませることは望んでいない』ロドリゲスさんという『報復は新たな悲しみをうむだけだ』」

私は娘が白血病で死にそうだった時(今は元気です)病院で「今、大地震が起きて東京がなくなってしまうばい」と考えたことがあった。無菌室で何も持ち込めない病室にも、聖書と十字架だけは持ち込んで祈り続けていたはずだった。なのに、そんな破壊的なことを何回も考えた。そういう私だから、悲劇の中でロドリゲス氏を初め、多くの自分を失わずに行動する人々を尊敬する。

明日は、仏教とキリスト教が合同で祈る集会に参加するつもりだ。グレゴリーさんの為にも祈る。

(山下暎子)

テロ事件に思うこと

これまで本誌は三月と九月の刊行を守ってきましたが、今号は始めて一ヶ月遅れとなりました。編集作業が最後の段階にかかる頃、あのテロ事件が起こりました。できれば何人かの方がたに今回の事件に関してのご意見を書いていただきたかったです。予定を変更することは難しく、編集を担当したわたしたちだけがこの問題について自分の感想を書くことにいたしました。

テレビであのような衝撃的な映像を見せられれば、だれもがテロを憎む気持ちを持ち、犠牲になった人びとを悼むのは当然です。多くの人が感情的になるのは致し方ないことかもしれません。しかしすぐさま、アメリカ大統領の口から報復のための武力行使が宣言されたのには驚きました。事件の首謀者(現段階ではそれもはっきり分かっていない)をやっつければ世界は平和になると考えているとしたら、あまりにも単純なカウボーイ的発想です。第一、どうすればあの事件を引き起こしたテロリストだけを選別して攻撃することができるのでしょうか。アフガニスタンの多くの市民が殺されるのは目に見えています。また、テロと闘うアメリカに協力しなければテロリストと同じであるという発言にも驚きました。善か悪かの二者択一の論

理はアメリカが批判するイスラム原理主義者の思想と違いはないのではないだろうか。イエスの精神はもはや彼等のなかには生きていないのでしょうか。

しかし、時間が経つにつれて、アメリカ国内からも違う意見が聞こえてくるようになりました。必ずしも報復だけがベストとは考えていないという声や、テロに対抗するのに力をもつてするのは、かえって暴力の連鎖を生み真の解決にはならないという意見、アメリカ中心のグローバリゼーションやイスラエル・パレスチナの和平プロセスが中断していることがテロの遠因なのだという意見も出始めています。こういう声は「国際紛争を解決する手段として武力の行使を永久に放棄」した平和憲法を持つ日本政府がまっさきに上げるべきだったと思いますが、情けないことに、この国の指導者は憲法前文の解釈を歪め、新しい法律を作っても自衛隊を派遣して、アメリカを支援しなければならぬと考えているようです。

九月二二日付の朝日新聞で饗場和彦氏がテロをなくすには「テロリストが生まれる土壌を分析し、テロが起きない構造をつくることが重要」だと述べていますが、その通りだと思います。そのための行動なら武力によらなくとも平和的な方法が可能だし、日本の憲法とも矛盾しないはずです。

政府の対応に対してはわたしの周辺でもいくつか反

対の動きがあります。わたしも気休めかもしれませんが、黙っているよりも反対の意思表示をした方がいいと思います、小泉首相宛にメールを出しました。

今号はとくにテーマを設けずに(1)日頃考えていらつしやることや(2)ご自分の仕事のことなどを自由に書いていただきました。バラエティに富んだ原稿が寄せられました。なお、今号に掲載した真鍋さんの原稿はスペースの関係で前号に掲載せられなかったものです。早くに原稿をお送りいただいた真鍋さんにはお詫びします。

(奥田暁子)

Womanspirit No. 32

2001年10月発行

発行 フェミニズム・宗教・平和の会

連絡先 〒180-0014

武蔵野市関前5-5-25

T/F 0422(53)8746

E-mail Akikovv@aol.com

<http://www.josei.com/womanspirit/>

郵便振替 00170-9-8031

定価 700円

印刷 (有)オクノプリント社